

須弥山石窟の分布と開鑿

羅 丰

The Layout and Excavation of the Xumishan Grottoes

Feng LUO

Abstract

Sumeru Grottoes, one of the largest grotto groups in Ningxia province, are located about 50 kilometers away from northwest of Guyuan in Ningxia province. The grottoes feature 8 spots and house more than 150 caves. Founded during the Northern Wei dynasty and used until the Ming and Qing dynasties, they were important Buddhist temples at the time. Presently, they are of great importance to the study on the spread and development of Buddhism in Guyuan and the northern areas from the Northern Wei dynasty until the Ming dynasty.

はじめに

須弥山は寧夏固原市の西北約 50 キロの黄鐸堡郷（図 1）に位置、六盤山脈の支脈の一つであり、南北に延びている。南北 1800 メートル、東西 700 メートルの範囲のなかに 100 あまりの大小の石窟が分布している。これらの石窟群は北魏の時代に造られ始め、北周、隋唐の開鑿最盛期を経て、宋、金、明の歴代に涉って大規模な修築が繰り返され、往時にあっては重要な仏教寺院であったが、清代以降は漸次衰えた。

一、 須弥山石窟の分布

須弥山石窟は清代に衰微して以降、知る人もまれであった。20 世紀 50 年代に入ると、始めて簡単な調査が行われた⁽¹⁾。1962 年、寧夏回族自治区文化局は文化財研究者を組織し、調査を行い、彫像が残されている 20 あまりの石窟に番号した。1982 年、寧夏文物管理委員会と中央美術学院は共同で須弥山

石窟の考古学的調査を行った⁽²⁾。この時指揮を取ったのは中央美術学院の王瀧教授である。この調査では石窟の分布状況の全容を明らかにし、各石窟に番号し、合計 132 窟に整理した。南は寺口水河から北は黒白溝まで、東は和尚墳から西は青山梁までの石窟群を八つに区分し、1～5 窟を大仏楼区、6～39 窟を子孫宮区、40～50 窟を円光寺区、51～103 窟を相国寺区、104～108 窟を桃花洞区、109～118 窟を松樹洼区、119～125 窟を三箇窟区、126～132 窟を黒石溝区（図 2）と分類した⁽³⁾。他にもいくつか番号されないものがあったが、後に付窟として整理され、石窟の総計は 156 に達した⁽⁴⁾。最近の調査では隣接する禪塔山窟区からさらに 10 窟が発見された⁽⁵⁾。

現存の須弥山石窟の区画分けと、石窟を掘削した際の人々の場所選定とは密接な関連がある。開鑿者は時代ごとに異なった区域を選択して石窟を穿ち、自然と区画分けがなされ、道路を開いて交通、連繫した（図 3）。

須弥山石窟はおおむね海拔 1680 メートル以上の

山上に穿たれ、多くのものが1700メートル以上の場所にある。言葉を換えると、須弥山石窟は大部分が山の中腹にあり、頂上付近に穿たれたものもある。これは明らかに山津波や流水による浸食を避けるためである。

須弥山において最も早く掘削されたのは子孫宮区南部と中部の石窟群であり、第14、24、32、33など14窟がそれである。これらは北魏に造られ始め、西魏に増修が加えられ、中心柱窟と仏殿窟とからなり、当時の僧尼の礼拝、集会、修行、説法受戒の場所であった。そのなかで33窟がもっとも大きく、面積は幅・奥行きが約8.2×8.3メートル、窟頂高約3.3メートル。石窟の前にもともと木造建築物があった(図4)。壊れてはいるものの、ユニークな構造で、珍しい形状を呈しており、同時代の中国石窟のなかでは孤例と言える。

僧禅窟はやや狭小であり、窟内には通常、彫像装飾が施されず、火炕、禅座があるのみで、面積は極めて小さく、一人しか入ることができない。僧禅窟は礼拝窟を囲むようにして造られている。

円光寺と相国寺の両区域は須弥山の中心部に位置する。ここには須弥山の主要な石窟が集中している。規模も大きく、数量も多く、彫像も精緻であり、須弥山を代表する石窟群と言える。

円光寺には主要なものとして五つの窟があり、切り立った崖壁に穿たれ、前面にはもともと木造建築物があった。台地上には明代の円光寺の旧跡が残る。この5窟は北周になるもので、同時に造られたものであろう。上部には二つの中心柱窟があり、平面形は方形を呈し、華麗な彫飾が施されている。下部の石窟は未完成のようである。同時に未完成なものとして、東側崖壁に石窟の扉用の溝のようなものが穿たれている。

円光寺石窟は基本的に北周時代に開鑿された当時の形状と風格とを留め、後世にも重修が加えられ、最後の改修は明代頃と考えられる。48窟の中心柱壁面には彩色を施された仏像画がある。

崖面の窟門上部には「人」字形に排水用の溝が切られ、雨水が崖面を伝って排水溝に流れ込み、石窟を保護するように作られている。

崖面の西側東南から山麓に沿って階段が設えてあり、北側の一段は山崩れの際に破損したが、南側は比較的よく保存されている。階段の外側には孔が開けられており、もともと木製の手摺りが設置されて

いたと思われる。

44窟には多くの陰刻や墨書題記が残されているが、その大部分は明代のものである。46窟にはチベット語の題記もみえる。

相国寺区には須弥山でもっとも重要な第51窟がある。これは一つの小山の内部を完全にくり抜いて造った一大中心柱窟であり、幅26メートル、奥行き18メートル、本尊の像は高さ7メートルに達する(図5〔1〕、図5〔2〕)。入り口の左上方にはもともと小龕一つがあり、内部には仏坐像二体が彫られ、西魏の作風を呈する。このことから、51窟の掘削順序は、まず上方に小龕を穿ち、続いて内部を開鑿していったことが分かる。惜しいことに、この一大石窟は未完成のままに終わっているようである。中心柱の正面の龕内の、仏像頭部に相当する部分の壁面に十数カ所の、長方形や円形の孔が穿たれている。推測するに、仏像頭部はもともと、銅など、より重い素材で制作されていたのではなかろうか。このような材質であれば、鍍金などの細工がより施しやすいのである。

石窟入り口に存する梁の架構の孔跡から分析すると、51窟にはもともと木製の窟檐二つが付いていたと思われる。石窟頂上には排水用の溝があり、雨水が流れるようになっている。

相国寺は51窟など、独立した小山に開鑿されたものの他、大部分の石窟はそれと隣接する山上に穿たれ、およそ40あまりの洞窟があり、須弥山石窟のなかでもっとも石窟の密集する区域となっている。北周石窟の他、唐代窟もこの区域に保存されている。

大仏楼区と桃花洞区は唐代に開鑿された重要な区域である。第5窟大仏楼はもともと景元寺といい、大龕内部に高さ20メートルに達する弥勒倚坐像が彫られ、なかなかの迫力があり、有名な唐代仏像の一つである。頂部には完璧な排水システムが整えられ、龕内には唐の大中三(849)年呂万中の題記がある。龕の前面にはかつて規模広大な三重の楼閣が建てられており、大仏楼と呼ばれていた。楼区の前面には寺口水河が流れており、第1窟の前には古代の道路の遺跡と建築物の柱跡が遺っている。

桃花洞区は前山から1キロほど離れた谷間にあり、桃の木が多く植えられていることから、桃花洞と呼ばれる。105窟は規模広大であり、特別な形状を取っている。石窟は前後二つに分かれ、それぞれ

中心柱を持ち、地蔵菩薩像などが安置され、石窟外正面の壁から見ると、四つの大型長方形の梁孔が認められる。ここから推測すると、105窟を中心とする五つの洞窟は一樣に一つの大型木造建築物の下にあり、これは三重の楼閣を持つもので内室には採光用の窓があった(図6〔1〕、図6〔2〕)。開鑿の時期はおおむね盛唐初期である。大型の木造建築によっていくつかの石窟を結合させるというのは、事前の緻密な設計に基づいてなされたものであろう。

二、 須弥山北周石窟を造営した人物

須弥山とはサンスクリット語 Sumern の音訳で、「宝山」の意であり、仏教世界の中心である。第1窟の仏立像の左側の衣の裾部に、西夏の趙諒祚の拱化三(1065)年になる墨書題記がある。「拱化三年七月十五日、……須弥山口 巡礼して竹石山中に至る。」(拱化三年七月十五日、……須弥山口巡礼至竹石□山中□⁽⁶⁾)。西夏の時代、原州の管轄下に置かれたものに須弥塞がある⁽⁷⁾。この塞は須弥山から名付けられたに相違なく、西夏時代にはすでに須弥山の名があったのである。これはチベット仏教の盛行と関連があるのかも知れない。明『嘉靖固原州志』卷上に「須弥山は州の北九十里に在り。上に古寺有りて、松柏桃李鬱然たり。即ち古の石門関遺址なり」(須弥山、在州北九十裏、上有古寺、松柏桃李鬱然、即古石門関遺址。)⁽⁸⁾とある。

北魏の太延三(436)年、原州を置き、後に高平鎮に改めた。北魏の軍隊の主力はここから涼州(今の甘肅武威)の北凉政権に侵攻し、北凉滅亡後は拓跋鮮卑が北方を統一した。高平に平穏が戻ると、大体この時期に仏教勢力が入り込み、北魏後期に入ると須弥山石窟の開鑿が始まった。北魏政権の短い平和の後、魏の孝文帝の漢化政策が失敗に帰すると、鮮卑の貴族らは北方の六カ所の重要な軍鎮において六鎮の乱を起こした。爾朱のグループが魏王室に影響下に置くようになると、高歡、宇文泰が相次いで興起、北魏の統一政権は東魏と西魏に分裂した。

六鎮の乱の際、高平鎮は重要な役割を果たすことになる。北魏が大將・賀拔岳を派遣して関隴を平定した時、宇文泰は別將として随行した。万俟醜奴が平定されると、宇文泰が原州を鎮守することとなり、当地の豪族である鮮卑の李賢一族と親交を結ぶ⁽⁹⁾。原州は宇文泰発祥の地であり、彼はここを根

拠地として高歡を討伐し、魏の文帝を奉じて長安に至った⁽¹⁰⁾。

宇文氏は西魏を討って北周王朝を立てた。北周はわずか二十五年ほどの期間しか存在しなかったが、須弥山においては非常に多くの重要な石窟を造営した。宇文氏と原州の李賢の系統との親密な交際は、われわれが北周の須弥山石窟について考えるに当たり、重要な視点となる。

宇文泰は仏教を篤く信仰し、「釈教を興隆し、大乘を崇重す。万機を撰総すと雖も、恒に三宝を揚ぐ。第内 常に百の法師を供し、経論を尋討し摩訶衍を講ぜしむ。」(興隆釈教、崇重大乗。雖撰総万機、而恒揚三宝。第内常供百法師、尋討経論講摩訶衍。)⁽¹¹⁾宇文氏一族と仏教との関係は非常に深く、多くの人が仏教の名詞を名前としている。例えば、宇文護は幼名が薩保⁽¹²⁾、宇文導は字が菩薩であり⁽¹³⁾、その従弟の一人は菩提といい⁽¹⁴⁾、もう一人の従弟は尉遲綱、字は婆羅といった⁽¹⁵⁾。このような名付け方は宇文氏と仏教との間の関係を傍証するものである。宇文導は宇文泰に従って原州一帯で活動した。「太祖 賀拔岳に随いて入関するに及び、導 従いて西し、長(つね)に征伐に従う。太祖 侯莫陳悦を討ちしとき、導を以て都督と為し、原州を鎮めしむ。悦 敗れて、北のかた故塞に走出するに及び、導 騎を率いて之を追ひ、牽屯山に至りて悦に及び、之を斬り、首を京師に伝う。」(及太祖随賀拔岳入関、導從而西、長従征伐。太祖討侯莫陳悦、以導為都督、鎮原州。及悦敗、北走出故塞、導率騎追之、至牽屯山及悦、斬之、伝首京師)⁽¹⁶⁾

宇文泰は二人の幼い子供を六年もの長い間李賢の家に預けていたことがあった⁽¹⁷⁾。われわれは李賢及びその家族の宗教信仰に関する直接的証拠を持たないが、李氏一族と宇文氏一族との密接な関係から、彼らが長期間盤踞した原州須弥山に、円光寺区45、46、51窟のような雄偉かつ精美的な石窟を開鑿したであろうと考えることは正当な推測である。その他、もう一件の証拠も、李氏一族が仏教を信仰していた可能性を示唆している。法門寺に、仏教活動と関わりのある結銜題名碑の残欠一片があり、合計6行分が残存していたが、そのなかの一行に「第七子豈、周□□申国公の孫」とあった⁽¹⁸⁾。調査の結果、北周代に申国公に封じられたのは李賢の弟李穆一人のみである⁽¹⁹⁾。その孫が他人とともに結銜して名を連ねているのは、明らかに仏教活動に参

与していることを示している。その先祖が原州須弥山において開鑿に関与した可能性があるとしても何ら不思議ではない。

須弥山の、北周 51 窟の開鑿は北周の武帝の排仏運動の影響で完成を見なかったが、隋代に入ると、続けていくつかの仏龕が穿たれた。

三、 須弥山石窟の開鑿工程

須弥山は主として第三紀の砂岩、泥岩、礫岩、及び白亜統六盤群の頁岩、泥灰岩によって形成される⁽²⁰⁾。石窟が穿たれている南側斜面は第三紀の砂岩で、赤紫色、橙色の中砂・粗砂状の構造を呈し、主として粘土質鉱物、鉄質、炭酸塩が凝固したもので、その含量は 5～10% であり、それらは碎屑鉱物とともに、薄膜状に、あるいは相互に融合する様式で、結合する。碎屑鉱物の主要成分は石英であり、約 70～80% を占め、それ以外は斜長石、燧石、白雲母、方解石、磁鉄鉱などである。岩質は柔らかく、結合はそれほど強くない。この種の紅砂岩の特徴は、開鑿しやすい点である。ただ結合力が弱いために水分を吸収し、湿気を帯びやすく、容易に風化剥落してしまう。この地方は東南風が盛んに吹き、西北風がこれに次ぐ⁽²¹⁾。人々が洞窟を開鑿する際、南向きで風のあたらない崖面を選んでいるのは、明らかに地質的要素を考慮した結果である。東向きというのもそれなりによい選択である。北向きのものは非常に少なく、ほんの数カ所があるのみだが、風化が著しい。

須弥山の石窟群は中心柱窟のものが多く、開鑿当時の工匠らは明らかに山体の岩石の特性を考慮している。第 45、46、51、105 窟などの重要な大型石窟もすべて中心柱を有するが、これは仏教建築の様式として必要であるのみならず、施工上の理由からも必要とされる。

工匠らは、雨水による浸食により石窟が破損するのを防ぐため、精緻な排水システムを設計し、石窟上方の崖面の、雨水が当たる部位に「人」字形の排水溝を切った。降雨時、雨水は溝を伝って、あらかじめ穿っておいた貯水穴に流れ込む。かくして、雨水による浸食を防ぐと同時に、僧侶らの生活用水の問題をも解決した⁽²²⁾。円光寺の 20 メートルに及ぶ排水システムは、石窟の保護に効力を発揮してきた。須弥山の 132 窟のうち、排水溝を有するのは

23 窟、17.42 パーセントを占め、そのうち北魏のものが 2、西魏が 2、北周が 6、北朝が 1、隋唐が 2、唐が 6、明清が 4 である。排水溝の形状は「人」字形 (11)、直線形 (10)、斜線型 (1)、アーチ形 (1) がある⁽²³⁾。

中心柱窟の特徴は、石窟中央部に方形の石柱を設え、柱と石窟頂部は繋がっており、四周が回廊になっている。掘削時、あらかじめ方形の柱を彫り残しておき、後にさらに彫刻を加え、柱の頂部は収分〔頂部を小さくする〕に造る。

石窟外の窟檐や楼閣などの木造建築物は、明らかに石窟を保護する働きをし、また石窟内部の活動可能な領域を拡大している。ただこうした建築物が、当初から建てられていたのか、それとも後世に築造されたものか、さらなる研究を要する。第 105 窟の石窟群前部の建造物はすべて当初から設計され、一度に建てられた可能性が高い。このため、石窟の前に 11 × 8 メートルの台が掘削され、八つの柱洞が穿たれている (図 7)。

須弥山石窟は山体の特徴を存分に利用し、重要な石窟の前部には寺院を建立するための台を築き、交通網を整備することにより、各山の区域間の連繫を可能にした。それぞれの時代に応じて、それぞれが活動可能な空間を有していたが、これは明らかに細心な設計に基づくものである。

注

- (1) 劉敏『甘肅固原の石窟造像』、『文物参考資料』、1956 年 4 期、54 頁。朱希元『寧夏須弥山円光寺石窟』、『文物』。
- (2) 寧夏回族自治区文物管理委員会等『須弥山石窟』文物出版社、1988 年、参照。
- (3) 寧夏回族自治区文物管理委員会等『須弥山石窟内容総録』文物出版社、1997 年、参照。
- (4) 1982 年の調査に継ぎ、1986 年、北京大学考古系は再び須弥山石窟に番号と再調査の作業を行い、先の調査で番号されなかった小龕に対しては新たに窟号を付けることはせず、附属窟に編入するという方法で解決した (馬世長等『須弥山石窟内容総録』、『須弥山石窟内容総録』、27 頁参照)。
- (5) この調査は寧夏文物考古研究所、浙江大学文化遺産学院聯合によって行われ、2010 年より開始、現在も進行中である。

- (6) 寧夏回族自治区文物管理委員会等『須弥山石窟』。韓有成等『須弥山石窟内容総録』28 頁。「須」字は韓有成が補ったものである。
- (7) 史金波等訳『天盛改旧定新律令』卷十第四「司序行文門」、北京法律出版社、1999 年、372 頁。原文訳は「西明寨」に作る。陳炳応『西夏文物研究』寧夏人民出版社、1985 年、244 頁では、「西明寨」を「須弥寨」と訳す。
- (8) 楊経『嘉靖固原州志』卷上、牛達生等点校本、寧夏人民出版社、1985 年、12 頁。
- (9) 『周書・李賢伝』卷二十五に、宇文泰は「原州に至り、遂に賢の第に幸し、齒に譲りて坐し、郷飲酒礼を行う。其后、太祖又た原州に至り、賢をして輅に乗せ、儀服を備えて、諸侯会遇の礼を以て相見せしめ、然る後に賢の第に幸し、歆宴日に中る」(至原州、遂幸賢第、讓齒而坐、行郷飲酒礼焉。其后、太祖又至原州、令賢乘輅、備儀服、以諸侯会遇礼相見、然后幸賢第、歆宴中日。)(中華書局標点本『周書・李賢伝』、頁 416) とある。
- (10) 『周書・文帝紀上』頁 6～13 頁。
- (11) 唐・道宣撰 郭紹林点校『統高僧伝(上)・菩提流支』、中華書局、2014 年、17 頁。
- (12) 『周書・晋蕩公護伝』卷十一、165 頁。
- (13) 『周書・邵惠公顓附宇文導伝』卷十、154 頁。
- (14) 『周書・莒莊公洛生伝』卷十、159 頁。
- (15) 『周書・尉遲綱伝』卷二十、349 頁。
- (16) 『周書・宇文導伝』卷十、154 頁。
- (17) 『周書・李賢伝』卷二十五、417 頁「高祖及び齊王憲の襁褓に在るや、避忌を以て、宮中に居るに利あらず、太祖 賢の家に之を処らしめ、六載にして乃ち宮に還らしむ。」(高祖及齊王憲之在襁褓也、以避忌、不利居宮中、太祖令於賢家处之、六載乃還宮。)
- (18) 陝西考古研究院等『法門寺考古発掘報告』文物出版社、2007 年、44 頁。
- (19) 『隋書・李穆伝』三十七卷、1116 頁。
- (20) 周特先等『寧夏構造地貌』寧夏人民出版社、1994 年版、91 頁参照。
- (21) 徐国相等編著『寧夏回族自治区地理』寧夏人民出版社、1999 年、80-99 頁参照。
- (22) 陳悦新『須弥山石窟概述』、『須弥山石窟内容総録』23 頁。
- (23) 寧夏回族自治区文物管理委員会等『須弥山石窟内容総録』文物出版社、1997 年版、27-180 頁。

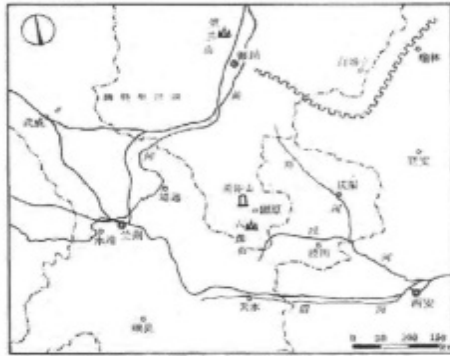


图1 須弥山石窟地理位置图

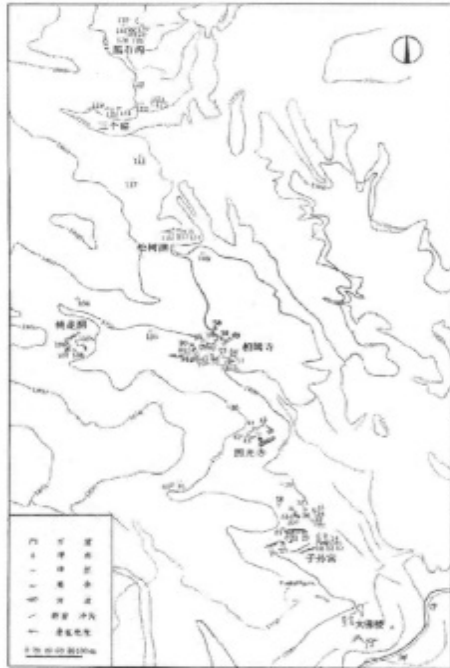


图2 須弥山石窟洞窟位置分布图

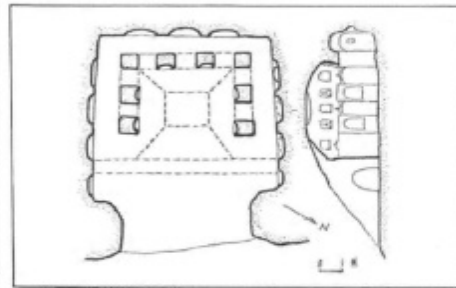


图4 第33窟平面・断面图

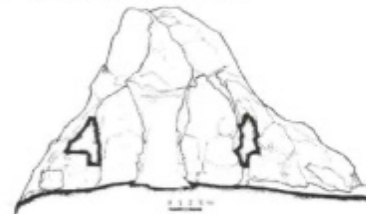


图5 [1] 第51窟横断面图

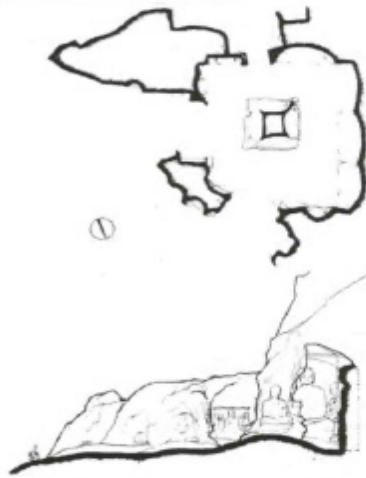


图5 [2] 第51窟平面图・縦断面图



图3 須弥山石窟全景图



図6〔1〕 桃花洞外景

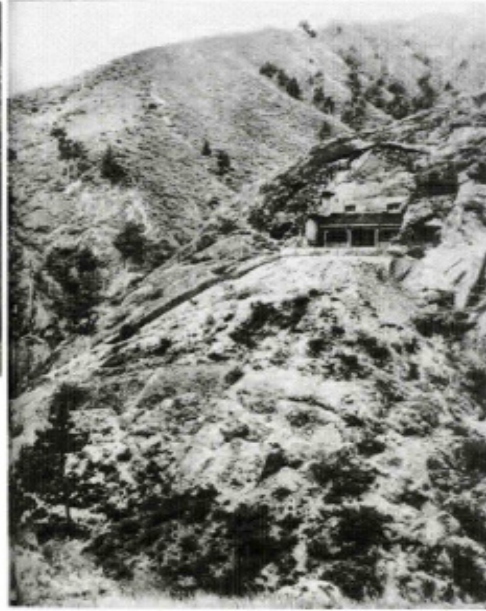


図6〔2〕 桃花洞外景

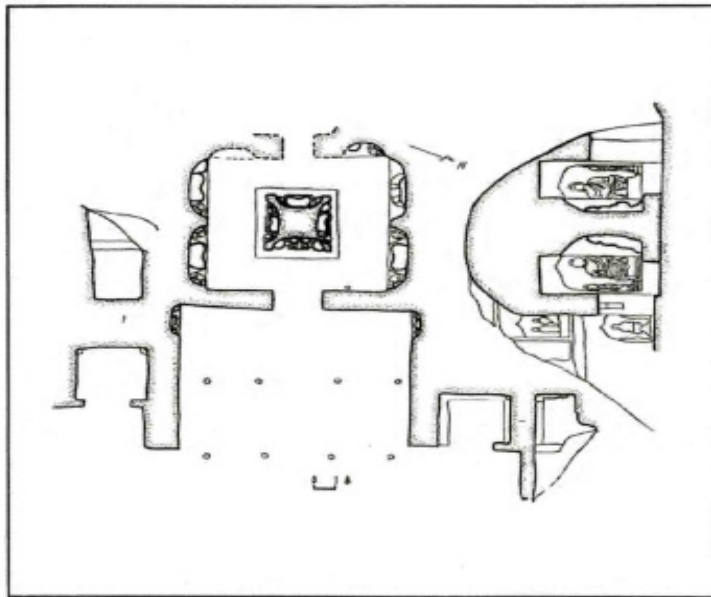


図7 第105窟・附1窟・附2窟平面・断面図

須弥山石窟排水溝統計表

No.	石窟番号	時代	形状
1	22	北魏	直線形
2	24	北魏	直線形
3	25	明清	「人」字形
4	27	明清	「人」字形
5	29	明清	「人」字形
6	31	明清	アーチ形
7	33	西魏	「人」字形
8	36	西魏	直線形
9	42	北周	斜線型
10	43	北周	「人」字形
11	44	北周	「人」字形
12	45 附窟	北周	「人」字形
13	46	北周	「人」字形
14	49	北周	直線形
15	64	唐	「人」字形
16	79	唐	直線形
17	99	唐	「人」字形
18	100	唐	直線形
19	101	唐	直線形
20	102	唐	直線形
21	119	北朝	「人」字形
22	129	隋唐	直線形
23	130	隋唐	直線形

出典：寧夏回族自治区文物管理委員会等『須弥山石窟内容総録』文物出版社、1997年版、27-180頁。